

掲載日 2022年8月9日

タイトル 津市大門・丸之内のこれから

執筆者 百五総合研究所 服部 諒

7月30日夜、3年ぶりに開催された津花火大会。コロナ対策で30分間に短縮した打ち上げではあったが、津市の夜空を約3000発の華が彩り、人々の目を楽しませた。足元では津市の中心街、大門・丸之内地区で、にぎわいあるまちづくりに向けた取り組みが始まっている。

2021年度、津市が国土交通省の「官民連携まちなか再生推進事業」を活用し実施した調査によると、大門・丸之内地区の20年の総人口は1955人と10年比15.5%減だった。35年には20年比28.4%減と一層の減少が見込まれている。大門・丸之内地区はかつて行政機関や企業、小さな飲食・小売店が立ち並ぶ街であったが、大門商店街エリアを筆頭に、シャッターをおろし利用されていらない建物や、すでに建物が取り壊され小さなコインパーキングになっっている土地など、いわゆる空き家・店舗、低未利用地が増加しており、空洞化は深刻だ。そのため、今年度、津

市は新たなまちづくり構想を策定するため、「大門・丸之内地区未来ビジョン策定委員会・分科会」を設置。委員やオブザーバーには国や県、地元自治会、商店街振興組合、三重交通、弊社を含む百五銀行グループのほか、まちづくりの専門家として三重大学や三重短期大学の教授が参画するなど、地域の産官学民が連携し、当地区の未来ビジョンを年度内に策定する予定だ。委員会・分科会には一般傍聴として約30人が集まるなど今後注目する住民等の姿もある。津市は住民等の意見募集をするほか、8月21日に「未来のカタリバー」と称した市民の話し合いの場を設けるなど、市民の積極的な参加も呼び掛けている。

大門・丸之内地区で10代30代の学生や若者が交遊する姿をほとんど見かけない。街のにぎわいは欠かせない。若者たちが津で集まる第一候補に大門・丸之内が挙がるようなまちづくりに、知恵を絞りたい。